2.漁師“左門”のむかし話

いんば沼 No.15 (1995.12.1.発行)

漁師〝左門〟のむかし話

成田市台方に、有名な左門さんがいます。この方は生まれながらの漁師さんで、印旛沼を愛し、印旛沼の魚と共に半生を生きてきました。漁ばかりでなく、沼をきれいにすることも熱心で、もう八十歳を越えた現在も印旛沼の水質監視員として、毎日のように沼辺をパトロールしています。その功績で、千葉県や環境庁から、何回も表彰されています。

今回は、この穴倉左門さんに、幼少の頃からの漁の様子について書いてもらいました。原稿と一緒に、自筆の挿絵まで送ってきてくれました。

では、左門さんのむかし話、始まりはじまり……。

（カッコ内は事務局で注を加えたものです。お許し下さい。）

「サモ！七十銭貸せよ」

おふくろに呼び止められこ。

「何で俺が……」

当時、小学校高等科（現在の中学に相当する）の十二、三才位であったろう。

私は、印旛沼の沼岸に生まれ、少年の頃から魚を取ることが大好きで、親に小使をせがむことはなかった。

春の出鰻（水温む頃にウナギが動き出すこと）の頃、ウナギは江川（印旛沼に注ぐ小川）で置き針を使って結構とれた。春先の雨が強く降ったときは、江川の流れが溢れ出し、原野を通して沼に流れていく。遡行期のドジョウやシマドジョウが、卵を腹一杯に抱えて遡ってくる。春四、五月頃の大雨で、浅瀬の水が変ると、沖からコイ、フナ、ナマズが産卵のために遡ってくる。

各地区の沼岸の家に、底のない長いザルが梁の上に置いてあるのを見ることがある。これは乗込み（産卵のために魚が浅瀬にくること）の魚を取る漁

具である。

コイの産卵は凄い。ヨシやマコモの中を狐火が走るように暴れ、ザンブザンブと凄い騒ぎである。あとから行ってみると、米の研ぎ汁を撒いたように、真白の液が浮遊している。

チマズは一匹の雌に三―四匹の雄が取巻き、渦をまいているようだ。ザブ網をかぶせると、大暴れして、四、五匹入って、どれから先に取るかと、迷うほどである。

この流れる江川の岸辺を、コヌカエビが重なり合って、縄のようにつながって川を遡っていく。そこに篠竹を吊して置くと、見事なコエビが、ジャーッと音を立てるほど採れたものだ。

昭和二十年の戦争によって、満蒙は失われ、焦だれ（台湾からしばれ落ちる者）ばかりとなり、昭の末期も昔の三分の一に減少した。水の色が赤くなるほど上ってきたエビガニも姿を消し、シジミも生活排水の影響か、悪臭がして食べられない状況だ。

昔は、清水のような、きれいな江川だった。春さきに「鯉踊、シジミ踊って来」とうたわれたが、二十年も経ってからもと、今がその一区切りとされた。昭の時代の昭に近い年数である程だった。

学校の遠足等で、魚を採ることが楽しき遠足の思い出、帰ると、その魚を捕った人のうわさ、魚とる話ばっかりの大津の浦へ乗り込んだ。浦賀の船乗りの話に耳をひそめていたヘチャモブナを釣る手ごたえは、第二金であった。静地が岸まで続き、夏は貝を取ったり、泳いで遊ぶのにも最高の場所であった。

最近は、ブラックバスやブルーギルなど、変な魚が増えて来魚を食い荒し、昔の面影は浅瀬にまで来て五匹が二匹の割合で食い、一網に二、三キロも獲れたエビガニも高嶺してしまった。それで、雑魚寄所の漁業者は転業してしまった。惜しまない次第である。

その頃は、四国産が新鮮を誇って高の中まで魚を買いに来ていた。当時は大アナ一匹が五円も戦であった。義浦道路（失業者などの生活を支えるために、行政が三本工事をおこして造る道路）の土方が、七合の飯を、皆を立てて、持ち上がるほど、キュッと詰めた弁当を持って、一旦働いでも五十銭が（やっと位だったから、漁をしていればお金に困らないことを、おそろしは知っていたのだろう。

建築屋に、上井佐吉兵衛という占いをする盲人がいた。少金持ちで、金を借りに行く人がいたが、お前ら横着者だ。チョッと江へ行けば川崎銀行があるでねえか！とやられていた。確かに印旛沼は金蔵である。一銭もなくても、次の日の漁次第で、充分に用立つことができた。

私も、四人の弟妹を次々と嫁に出した。娘さぞは、もう施設だ。まごまごしている間に、縁談がお来る。大尽から結婚をもらったり、木を切るなどの手立てもあるが、貧者には、かなわぬことだ。幾度、漁業に専稲こめて、処理するのが今日までの常識である。

丁方という姿に鵜沢弥之松という人がいた。黄金（魚を取る定置網の一種）八統を持っていて、一統百万とも言われていた。当時、私も二統あって、補修のために、私の神人妻さんでもある近所の義屋に頼、三万円立ててもらいに行ったところ、

「先言、那之松に言してしまって、今は無言だ」と言われた。

十日ほど過ぎた頃、

「左門、那之松から返されたぞ。今ならあるぞ」

「俺も両に合ったよ」

丁ラウナギ漁が相当に好調だったからだ。

風、大雨の場合は、八千代、佐倉、下印旛、成田地先、対岸のどこの河岸でも同じように流がある。下りウナギが終って、一霜来る頃から、コイ、フナが下って行き、来春、再び遡上して来る。印旛沼の水の栄養も最適だし、魚には住みやすい沼なのだろう。

寒中は、見取り漁の頃から寒ブナの季節となる。きれいに澄んだ沼底に、ウナギのフキ（ウナギが潜ったところに出来る泥模様）や寒ブナを追う季節は、寒気の厳しいときでも、楽しいものだ。

……楽しいお話はまだ沢山あると思いますが、あとは左門さん自筆の絵で想像をふくらませてください。（事務局）

出典：（財）印旛沼環境基金 1995，12，1 発行、いんば沼 №15、「漁師左門のむかし話」

印旛沼学習指導の手引き

平成 22 年 3 月　初版発行
平成 23 年　月　2 版発行

編集：印旛沼流域水循環健全化会議　みためし行動学び系ワーキング

代表執筆者：小川かほる（みためし行動学び系ワーキング委員）

発行：印旛沼流域水循環健全化会議　事務局
千葉県　県土整備部　河川環境課
環境生活部　水質保全課